

シネマ通信

第22号(2026年4月14日)



ハムネット

第22回鑑賞作品

監督:クロエ・ジャオ

脚本:クロエ・ジャオ, マギー・オファーレル

出演:ジェシー・バックリー(アグネス・シェイクスピア), ポール・メスカル(ウィリアム・シェイクスピア)

エミリー・ワトソン, ジョー・アルウィン 他

1580年、イギリスの小さな村で、貧しいラテン語教師:ウィリアム・シェイクスピアは、森を愛し自然と共に生きるアグネスと出逢う。初対面から惹かれたウィリアムが求愛。やがて二人は、情熱的な恋に落ちて結婚し、3人の子供に恵まれる。しかし、アグネスは夫を縛りつけることを嫌い、ウィリアムは演劇の道に進むべく一人ロンドンで暮らすことになる。別々に生活しながらも強い絆で結ばれた二人だったが大きな悲劇が一家を襲い…

「ハムレット」の誕生秘話を、妻の目で描いた作品。英女性小説賞と全米批評家協会賞を受賞したマギー・オファーレルの同名小説の映画化です。本年度アカデミー賞で8部門にノミネートされ、ジェシー・バックリーが主演女優賞を獲得しました。

シェイクスピアと
その妻アグネス
世界に冠たる名作の裏に
二人の真実があった



About Them

「ハムネット」の監督:クロエ・ジャオは、1982年の北京生まれ。後に両親は離婚し、父親が女優の宋丹丹(ソウ・タンタン)と再婚。非常に反抗的な少女だったため、両親によりロンドンの寄宿学校に送られました。その後ロスアンゼルス的高校を出て大学では政治科学を専攻。職を転々とした後、ニューヨーク大学ティッシュ・スクール・オブ・アートで映画を学びました。

現代のアメリカインディアンの若者を描いた「兄が教えてくれた歌」、現代を生きるカウボーイを追った「ザ・ライダー」は共にカンヌ国際映画祭で上映され、後者がインディペンダント・スピリット賞の作品賞及び監督賞の候補となりました。しかし、彼女を世界的監督に押し上げたのは、第93回アカデミー賞で、作品賞・監督賞・主演女優賞を受賞した「ノマドランド」といえるでしょう。こちらも、女性を主人公とする物語。クロエ・ジャオは、二つの代表作で、それぞれの主演女優にアカデミー主演女優賞をもたらしました。「私はキャラクターの内側の世界を、常に外側の世界に結びつけている」と語っているように、過剰な演技指導はせず、俳優がもつ力を最大限に引き出すことが彼女の監督哲学のようです。



About Something

昨年から、大学の同級生によるLINEができました。気軽なチャットルームです。そこに、普段は多くを語らないM君から「今日これから『冒険者たち』のラストシーンとなった要塞を見に行きます」との発信。大学時代、彼とは時折 映画情報を交わすだけの関係でしたが、さっそく、録画してあった『冒険者たち』を見直しました。パリで自由に生きる二人の男友達(アラン・ドロン、リノ・バンチェラ)と失意の女性アーティスト(ジョアンナ・シムカス)が、海に眠る財宝を求めて旅に出るという物語。財宝は発見するが執拗にギャングに追われ……。詳細は忘れていましたが、胸にしみるメロディーに乗って若き日の感動が甦ってきました。不朽の名作というほどの深みは無いけれど、何故か心を捉える作品。その何故かを自らに問うと、事実経過を淡々と描いているのにどこか現実離れたこの映画の“雰囲気”が好きなのだと思います。至りました。当時は『ティファニーで朝食を』のように“雰囲気”で魅せる作品が色々ありましたが、今日ではあまり見当たりません。アクション映画全盛の時代。文芸作品といえども、雰囲気よりもテーマ性・ドラマ性、淡々よりも饒舌、リアルな人物描写が必要となってきたのでしょうか。若かりし頃は、男女を問わず素敵な人に出会うと「あの人、雰囲気あるわね」などと、よく言ったものですが、近年は、こんなフレーズは口にも耳にもしないように思います。デジタルで全てを数値化し、AIで可能な限りクリアな答えを出す世の中では、“雰囲気”などという曖昧模糊たる言葉の存在意義は、次第に薄れてゆくのかも知れません。でも、“雰囲気の良いレストラン”という形容は、まだ、現役ですね？

そうだ、今日から“雰囲気のある大人”を目指すことにしよう。フッフ、ほんの戯れ言でございます。

ちなみに先日帰国したM君のリポート第一声は「ラ・ロッシュェル(要塞のある古い港町)の近くにロシュフォールがあるらしい！！」でした。カトリーヌ・ドヌーブ、フランソワーズ・ドルリアック姉妹が共演した『ロシュフォールの恋人たち』。この懐かしい地名！お洒落な雰囲気！映画ファンの方なら、きっとご記憶にあることでしょう。